

目的別音楽聴取傾向に関する基礎的研究

鈴木 美生

(広島大学大学院総合科学研究科)

問題と目的

音楽聴取は日常における行動や感情とも密接に関係している。松本(2002)は、強い悲しみを感じているときに悲しい音楽、少し悲しい気分の時には明るい音楽を聴取することで悲しみが低減することを報告している。Van Den Tol, & Edwards (2011)では、悲しい音楽を聴く目的として、自分の気持ちと曲の情感の一致、歌詞からポジティブなメッセージ性の読み取り、その曲にまつわる記憶を呼び起こすことをあげている。悲しい音楽の聴取の機能としては自身の気分を理解すること、内省や感情を沈めること、感情や考えから距離を置くことなどがあげられている。安田・西・清水(2004)は悲しい音楽を聴く際の動機づけを質的調査により検討し、「同質性仮説的利用」、「気分の転換・注意の転導」、「対症療法的仮説的利用」の3カテゴリーに分類されるとし、必ずしもAltushuler(1954)の「同質の原理」に沿うわけではないことを示唆している。悲しい気分の時の音楽聴取についての研究に加え、他の感情に関する検討、音楽の要素に着目する必要がある。

本研究では、日常生活における音楽聴取行動・音楽選択から、落ち込んだとき・楽しい気分のおける音楽聴取行動・音楽選択についての検討を行った。

方法

調査時期 2018年7月上旬

調査対象 大学院生9名(男性4名女性5名 平均年齢22.56, SD=0.68)を対象に、半構造化面接による調査を行った。

質問項目:(1)日常における音楽聴取活動について(頻度、音楽を聴く手段、音楽聴取の目的、嗜好)音楽を聴く頻度や手段、音楽を聴くシチュエーション、音楽のどの要素(歌詞など)を重視するか。(2)音楽聴取とリカバリー:すごく落ち込んだ経験とそのときの気分、回復の方法、そのときの音楽聴取の有無、それによる変化。(3)音楽聴取と感情:気分によって音楽を選ぶことがあるか、楽しいときに、さらに気分を盛り上げる目的で聴くことはあるか。

分析方法 半構造化面接により得られたデータを質問項目ごとにカードを作成し、筆者含む大学院生3人でKJ法によりグルーピングを行った。

結果

1.日常における音楽との関わり:音楽を聴く頻度としては一人を除く全員が毎日聴くと回答した。

音楽を聴く手段はスマートフォンなど音楽機器を含む「デバイス」と、ラジオや動画配信サイトYouTubeなどの「メディア」となった。

2.音楽聴取行動の目的・嗜好 音楽を聴くシチュエーションは「作業中」「雑用中」「移動中」「休憩中」「勉強中」「寝る前」であり、音楽聴取の目的(理由)は「集中したいとき」「テンションを上げたい時」「リフレッシュ」「切り替え」「リラックス」「単に聴きたい」があげられた。音楽の選択の基準として「歌詞は重視しない」「歌詞重視」「メロディ重視」「テンポ重視」「リズム感」「お気に入り」「曲調」「気分合うかどうか」「聞き流せるかどうか」をあげていた。

3.感情状態と音楽 落ち込んだ経験に関しては「失恋」「人間関係」「自分の能力に関連する失敗」があり、その時は、「自分を省みる」「衝撃」「静的なネガティブ感情」「動的なネガティブ感情」「苦しみ」という状態になっていることがわかった。その状況下での音楽との関わりは「歌詞」「音楽」「埋め合わせ」「聴いているが意識はしていない」「そもそも聴かない」に分けられた。楽しい気分をさらに盛り上げたいときには「曲調」「ジャンル」「お気に入りのアーティストの曲」を重視するという一方、「聴かない」という回答もあった。

4.音楽と記憶 音楽に関連する記憶によるエピソードとその関わりとしては「過去を思い出して懐かしむ」「過去を思い出して元気になる」があげられた。

考察・今後の展望

日常における音楽選択には聴き手の好みをはじめ、曲と気分との一致等が決め手になることが分かった。落ち込んだ状況における音楽聴取行動においては概ね安田ら(2004)のカテゴリーに対応していた。必ずしも悲しい音楽を聴くというわけではなく、明るい曲を聴くという回答も得られたため、「同質の原理」がすべての状況に当てはまるとは言えないことが本研究でも確認された。その中で、落ち込みからの回復の助けになったことの一つに、歌詞内容が関連することが示唆された。今後は音楽聴取時の感情状態や置かれている状況に着目することに加え、気分の改善において歌詞がどのような役割をするのかを検討する必要がある。